

母と語る

(3)

倉橋惣三

○わが子の新入園は、子どもばかりのことではなく、親もいつしよに新しい生活に入ることだといわなければならぬ。幼稚園はただ幼児を預るところでないのは勿論、幼稚園だけで幼児が教育出来ることはない。母が忙しいから、すなわち、家庭教育が充分に行われ難いから、幼稚園で補うということはある。しかし、そういう場合でも、母の方から言う譯のものではない筈である。實際は手が足りず、或は物の足りないことがあつても、母の心が足りないでは済まされない。世間のことでも、人に助けて貰うから自分は任せつきりで平氣ということはない。人に補つて貰えば、自分はいよゝ心を使わずにいられないものだ。わが子の入園と共に、母の新しい生活が初まるというのも、この意味である。

○特に忙しい母の場合は、それに應じた特別としても、もと幼稚園は、幼児の教育を母と協力して完成させようとするところである。つまりは、親と先生との共同體といつてもいい。アメリカではそこを組織化して、「親と先生との會」というものが、幼稚園(小學校でも)に必ずある。わが園でも是非それがほしいが、そういう組織があるなしに拘らず、親

と先生と、常に教育に協力しなければならぬ。互に教育の方針を理解しあい、互に教育の方法を研究しあい、互に教育を正しく分擔しあつてゆかなくてはならない。

○「親と先生の會」の活動は多く又廣い。そのことは暫く別としても、わが子の上に就て、親が先生と、最もよく話あひもし、打合せもし、責任をわちあひもすることは、餘りにも當然なことである。教育の研究や經驗においては、先生は學問家である。多くの親は及ばないであらう。しかし、わが子を思う心、わが子を知ることにおいて、親は先生以上の筈である。先生よろしく願ひしますで、頼みつきり、任せつばなしでいられないし、いついゝものではない。

○特に、終日終夜忙しいというでなく、氣の毒な事情のためにわが子を顧みられないというのでもない家庭としては、幼稚園入園と共に、寧ろ母の教育的關心や努力が、一段と多くなるべきものと考えていゝ。少くも、そうであつてこそ、幼稚園の教育の効果が一層多くなるのである。というのは、幼稚園の責任を少しでものがれようとするのではない。幼稚園で教育して呉れるから、その分だけ家庭で教育をへらす。甚しきはやめるから、その分だけ家庭で教育をへらす。甚ことになるか。こんな無駄な話はない。

○幼稚園を幼児教育の専門家だと思つて、わが子を通わせるのなら、その幼稚園から親も學んでいゝ筈である。學ぶといつては適當でないかも知れないが、考えさせられ、注意させられるところもある筈である。(それが少しもないような、つ

まり親から見て全く敬意を拂うに足りないような幼稚園へ大
切なわが子を通わせる筈はない道理からこういえる。しかも
それは、幼稚園がえらいからというよりも、わが子の親とし
ての、母の反省から出ることである。親とは、わが子のため
に、自ら足りないところあるのを常に心配しているものであ
るから。

○幼稚園で考えさせられ、注意させられるといつても、必ず
しも、教育の方法上のことばかりではない。先ず、わが子を
大勢のほかの子の中に置いてみて、わが子がどんな子どもか
ということが初めてよく分るのである。家庭でわが子ばかり
を見つめている親としては、わが子かわいさに、わが子のい
ゝところばかり気がつき、わが子の缺點が気がつかない。い
ゝところというのも、狭い自己流の見方からであり、缺點に
気がつくとしても、いつか見方がまひしてしまつたりする。
それを、いろ／＼のほかの子とくらべてみ得る時、今更のよ
うに、わが子の長所短所がはつきりして来る。幼稚園はこの
點でも、親にとつての大きな學校である。

○更に、わが子の長所短所がはつきり見えた時、それが何故
そうなのかという原因を、考え又注意せずにはいられなくな
る。ところで、その原因というものは、淺くも深くもさまざま
まであるが、親として一番考えさせられ、注意せずにはいられ
なくなるのは、わが子の上に及ぼしている自分そのものであ
ろう。あのいゝお子さん。その母に會つてみて、なるほどと
うなづかれるし、その家庭をよく聞いてみて、あらそわれな

いものだと感心させられることが稀でなからう。

○幼児も、教育性の濃いところ、教育性の廣いところへ入園
したのである。どうも淺くなり易く、狭くなり勝ちな母も、
わが子といつしよに利用すべきいゝ機會であるまいか。こと
によつたら、母が先ずその機會を利用することによつて、わ
が子の入園が眞に入園になれるといつていゝかも知れない位
である。

○以上のことは、お子さんが小學校に入學せられてからも同
じである。或は幼稚園以上かも知れない。幼稚園の入園は、
その手はじめとしても、注意が必要である。そんな譯で、少
々強い語氣をおゆるし下さい。幼稚園に預けつばなしの家庭
も無いといえないからです。

○幼稚園の先生は、そのこまやかな心を以て、次から次へと
お子さんの世話をしたくなる。世話の行き届くことこそ、保
育者の任務だということも忘れない。しかし、幼稚園として
は、家庭の受持つべき部分を殘しておくことも忘れてならな
いともいえる。あんまりいゝ先生になつて、だめな母をつく
つてはならないといつたら、少々皮肉に聞えそうだが、よき
母のみが、先生を一層よき先生にするということはお母さま
ま方に考えていたゞきたいことではないでしょうか。

○どつちにしても、幼稚園が家庭により、家庭が幼稚園によ
り、互に力づけられてこそ子どもは一番よく教育せられる。

X

X